

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25284105

研究課題名(和文) 英語教育における特別な支援の在り方—小中高大の連携を通して

研究課題名(英文) Ways to Support English Classes and Special Education: Collaboration among Primary, Secondary and Tertiary Schools

研究代表者

大谷 みどり (Otani, Midori)

島根大学・教育学部・教授

研究者番号：80533299

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本人にとっての第2言語習得と特別支援教育の視点から、通常学級の英語授業における児童生徒のつまずきを分析し、具体的な支援方法の開発及びそれに基づいた小中高教員との研究会活動、加えて今後の教員養成への提案を目的とした。島根・鳥取の全小中高校にアンケート調査を依頼、英語授業において教師から見た児童生徒のつまずきを分析し、音韻意識、ワーキングメモリー、言語分析能力、記憶力等における課題が明らかになった。また特別支援教育先進国視察で得た知見も含め、英語学習におけるつまずきの背景と、支援のための具体的な活動例・教材を含めた報告書を2回にわたり作成し、島根・鳥取両県の全小中高等学校に配布した

研究成果の概要(英文)：The purpose of our research project is to help the children who have been struggling with learning English, by finding out their difficulties, exploring their background and reasons, and figuring approaches as well as teaching materials to assist their learning. We administered the questionnaires to all the elementary schools, junior high schools and high schools in Shimane and Tottori prefectures, to grasp how teachers perceive their students' difficulties in studying English. As influential factors to cause the difficulties, we found various elements such as working memory, phonological awareness and differences between Japanese and English. Based on our findings and our research trip to overseas, we edited two reports to explain theoretical background of the difficulties with concrete suggestions and teaching materials to help children, which were sent to all the schools in the two prefectures above

研究分野：英語教育

キーワード：英語教育 特別支援教育 認知特性 学習支援 教授法

1. 研究開始当初の背景

(1)通常学級における支援研究の必要性

昨今の教育現場では学習者間の学力差が顕著になり、発達障害や学習障害を抱える学習者も増加していると共に、認知特性に応じた適切な指導法の在り方⁽¹⁾の重要性も指摘され始めてきている。平成 17 年に発達障害者支援法の公布、平成 18 年 6 月には学校教育法の改正が行われ、平成 19 年 4 月から障害のある児童生徒等の教育の充実を図るため、小・中学校に在籍する教育上特別の支援を必要とする児童生徒等に対して、適切な教育（特別支援教育）を行う事が明確に位置づけられた。この間、各教育機関に対して量的な調査は実施されるものの、質的な調査からのフィードバックとして現場に還元されることはあまりなかった。また特別支援学級や特別支援学校での科目教育分野での研究は進められる一方⁽²⁾、通常学級や通常学校における特別支援を要する科目教育の研究は殆どなく、その実践は教師個人の努力に任されているケースが多く見られた。

(2)英語教育における学習者支援の必要性

英語教育においても支援の充実が急務であった。通常学級での特別支援教育の重要性を感じ孤軍奮闘している多くの教員からの要請で、本研究者たちは「特別支援と英語教育」の研究会を立ち上げ、特別支援教育の専門家による講演、各英語教員の取り組みの紹介・情報交換等を行ってきた。教育現場で日々授業の工夫に悩む教員を支援できる体制と教材等の充実が急務であり、必要性はさらに高まりを見せている。

学習に困難を感じる児童生徒は科目の特質上、英語科目において顕著に現れやすい。また他教科と異なり 4 技能別評価である為、技能別に困難を感じる生徒が見つけやすい。ディスレキシア等文字に関する障がい以外においても、通常学級における特別支援教育の先進国での実践例⁽³⁾を視察し参考にしながら、すべての学習者たちが学習意欲を失うことなく意欲的に英語学習に取り組めるよう、特別支援教育の視点を取り入れた英語教育の体系化が喫緊の課題であった。同時に、子供たちへの支援を充実させるためには、小中高大の連携が不可欠であった。

2. 研究の目的

「インクルーシブ教育」と「ユニバーサルデザイン」を核とし『英語という教科の特性を活かし、通常学級における様々な生徒のニーズに合った支援の方法を探り、個々の能力を最大限に伸ばす英語教育の在り方』の体系化を目的とした。具体的な目標は次の通り。

- a) 「英語学習全般で学習者が感じる困り感と指導者が持つ指導上の問題の収集・分析
- b) 上記の課題解決に向け、特別支援教育先進国の教育現場視察研究を含め、学習者の認知特性も考慮に入れた言語活動例・教材集や授業構成例を考案、構築。
- c) 本研究を通して考案・構築した言語活動例・教材集や授業構成例の公表と、教員研修等への活用、教員養成カリキュラムへの提言。

3. 研究の方法

(1)小中高教員から見た英語授業における子どものつまずきに関するアンケート調査
通常学級の英語授業における児童生徒のつまずきに関して教員の認識を分析するにあたり、計画当初、日本における先行研究は殆どなかった。従って小学校教員を対象にした調査では自由記述での回答を軸にした。中高教員においては、「英語学習に観察されるつまずき」(表 1)と「日常生活で観察されるむずかしさ」(表 2)についての質問を準備した。英語のつまずきに関しては、LDI-R⁽⁴⁾を参考にしながら調査項目を作成した(紙面の都合上、詳細は本研究の報告書を参照。項目は表 1 のとおり)。各質問について学習者に観察される頻度を問い、「よくある(10人に1人程度)、時々ある(20~30人に1人程度)、稀にある(40人に1人程度)、ない」の4件法で回答を求めた。

作成したアンケート調査紙は、島根・鳥取両県の全ての小学校・中学校・高等学校に郵送した。調査時期・対象校数等は下記のとおりである。

- ・調査時期：平成 25 年 9 月～12 月
- ・調査(送付)対象校：
 - 島根県・鳥取県すべての小中高高等学校
(全体対象学校数 小学校 359 校、
中学校 168 校、高校 79 校)
- ・回答教員数 小学校：261 名/134 校
中学校：135 名/60 校
高校：126 名/33 校
- ・回収率 小学校：37.3%
中学校：35.7%
高校：41.7%

(2)小中高教員(主に外国語活動・英語科担当との勉強会・研究会、授業見学・協議における意見交換、聞き取り調査等を通して、活動例・教材の収集・作成・開発

(3)特別支援教育先進国視察等を通しての情報収集、意見交換。海外からの講演者招聘。

・視察先：米国サクラメント Greenwood Elementary school, Language Academy of Sacramento (Charter School), Cal Middle School, South Tahoe High School, Coyote

4. 研究成果

(1) 中学高校英語教員からの回答集計と分析
(回答教員数：中学校 135 名、高校 126 名)

英語学習上のつまずき

(「よくある(10人に1人程度)」「時々ある(20~30人に1人程度)」を選んだ割合の合計)

中学校・高校教員から見た生徒のつまずきに

分類	質問項目	中学	高校
聞く・聴解	1. 英語(単語、句、節、短文など)を聞いたとおりに復唱することができない	64%	66%
	2. 英文を聞いて内容を理解することが困難である	94%	94%
	3. 聞いた英語を文字化することが困難である(音声を文字化する困難)	94%	93%
音	4. 音の聞き間違いが多い	71%	81%
	5. 読みと文字が一致せず、書かれた英語を音読することが困難である(文字を音声化する困難)	88%	88%
	6. 発話する際に音の言い間違いが多い	75%	84%
読解	7. 読解をする際に黙読できず、自分で声にださないと理解できない	30%	33%
	8. 読解の際、前に読んだ部分を保持するのが困難で、英文を何度も読み返さないと理解できない	73%	74%
	9. 意味のまとまり(チャンク)がわからない	91%	91%
文法・文字	10. 英語の語順が理解できていない(主語 動詞などの順序に日本語の語順が影響するなど)	94%	89%
	11. 文法が理解できないことが多い(受動態や進行形など文法規則が理解できない)	93%	92%
	12. 英語(アルファベット)の綴り字が困難であり、不要な箇所で大文字と小文字が混ざる	54%	47%
書き・作文・暗記	13. 英文を書く際に罫線や表の中に書き込むことができず、文字の大きさや間隔が一定でない	58%	43%
	14. 英作文をする際に内容に一貫性がなく、接続詞なども適切に使われていない	88%	85%
	15. 書くよりも音声で綴りを言うほうが容易である	69%	43%
	16. 英文や英単語をおぼえることが困難である	95%	89%

表 1. 教員から見た英語授業における生徒のつまずき(「よくある(10人に1人程度)」「時々ある(20~30人に1人程度)」を選んだ割合の合計)

ついて、中高ともに観察される頻度が高かった項目をまとめると、以下の通りである。

2. 英文を聞いて内容を理解することが困難
3. 聞いた英語を文字化することが困難
5. 読みと文字不一致、書かれた英語を音読困難
9. 意味のまとまりがわからない

10. 英語の語順が理解困難

11. 文法が理解困難

14. 英作文に一貫性がなく、接続詞の不適切な利用

16. 暗記困難

もっとも頻度の高かった「2」では、情報保持力やワーキングメモリといった能力が不足していると考えられる。また、「3」「5」は、音韻符号化能力や音声認識能力、さらに「9」「10」「14」では言語分析能力の不足が原因となっていると推察される。「16」については、言語学習において暗記力はやはり欠かせないものであり、何らかの原因で、暗記する活動に困難がある場合には、言語学習を支えるほかの能力で補填する方法を検討する必要があると考えられる。

学校生活全般でのつまずき

「英語学習上のつまずき」項目で該当する生徒について、学校生活を送る上で見かける項目についての回答

	中学	高校
1. 論理的に考えをまとめるのが困難であり、断片的な発言が多い	89%	87%
2. 授業中、集中力がなく居眠りなどが多い	68%	75%
3. 学年齢相当の計算が正確にできない	76%	64%
4. 暗記することが苦手である	89%	90%
5. 読解の際に行を飛ばしたり、読み間違いが多い	62%	60%
6. 文字を書くのが苦手である(他者が解読するのが困難である)	71%	60%
7. 黒板の文字をノートに写したり、形を写すことや模写が困難である	66%	50%
8. 指示や説明を聞いて理解し、行動することが困難である	71%	62%
9. 運動が苦手である(例:走り方がぎこちなかったりする)	49%	37%
10. 手先を使った細かな作業が苦手である	61%	41%

表 2. 英語でつまずきがあると思われる生徒について(「よくある(10人に1人程度)」「時々ある(20~30人に1人程度)」を選んだ割合)

中学校、高校で共通して観察される頻度の高い困難さは「1. 論理的に考えをまとめるのが困難。断片的発言」と「4. 暗記することが困難」であった。論理性と暗記力については、英語学習以外の場面においても観察されている。つまり、英語学習に特化して、その指導上養成すべき点として注目すべきは、「音韻符号化能力や音声認識能力」と考えられる。

(2) 小学校教員からの回答分析

通常学級の外国語活動における児童の困り感やつまずきを、教員がどのように認識しているかを知るため、小学校教員対象には自由

記述での回答も求めた。(回答者数 261 名)
 「通常学級で外国語活動に取り組んでいる際、困り感やつまづきがある、もしくは特に支援を必要とする児童がいると思うか」という質問に対しては、「よくある」が 58 名(22.1%)、「時々ある」119 名(45.4%)「まれにある」48 名(18.3%)「ない」28 名(10.7%)「未記入」9 名(3.4%)という結果となった。「よくある」と「時々ある」をあわせると、全体の 7 割近く(67.5%)となり、外国語活動の時間に困り感を持つ児童が、教員の目から見て一定の割合でいることが明らかになった。続いて、児童の困り感やつまづきに関する教員の自由記述を分析した結果、表 3 の通り 10 項目に分類ができた。(% には、コメント数/回答教員数を示している。)

困り感	詳細	コメント数	コメント数/回答教員数
英語を聞くこと	英語の音(含ALTの発話)を聞き取り困難・非日本語音不安・聞きとり自体困難	53	20%
英語を発する・話すこと	聞き取り困難 発話困難、発音困難、自信なさ・照れ	75	29%
聴覚情報への依存	音のみへの依存・文字の存在の薄さ	37	14%
声を出すことへの抵抗感	声を出すこと自体への抵抗感・自己表現の難しさ	24	9%
記憶	単語・文記憶困難・記憶して活動につなげる困難	31	12%
人との関わり	人とのコミュニケーションの難しさ	31	12%
英語への抵抗・苦手感	英語を聞く・話すことに対するストレス	16	6%
活動ルール理解	言語活動ルール理解の困難	7	3%
児童間のギャップ	英語学習経験が無いことからの劣等感	17	7%

表 3. 小学校教員から見た児童のつまづきに関する記述の分類(回答者数 261 名)

その他	71	27%
-----	----	-----

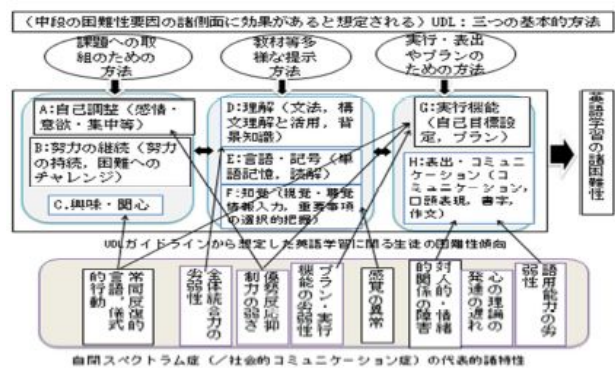
本調査の結果、英語学習におけるつまづきは、音韻意識に関わる部分が大きいと考えられる。音韻意識は、言語学習には不可欠なものであり、それは書字能力にも影響し、さらに、読解力に大きく影響する。とすると、やはり英語学習が開始される前の母国語の音韻意識と書字能力をきちんと把握し、そこに問題がないかどうかを判断する必要がある。その上で、英語学習が開始される小学校中学年までに間に合うように、日本語の音韻

意識と書字能力を、聴覚と視覚の両面から手立てし、英語の音を十分考慮した学習順序とインプットのプロセスで丁寧に導入することが必要であろう。紙面の都合上、概要のみを記載するが、詳細は別途、下記の報告書を参照されたい。

(3)発達障がいと英語学習:自閉スペクトラム症の特性から見た英語学習の例

紙面の都合上、多くを掲載することが出来ないが、発達障がいと英語学習の関連性についての一例をあげる。

通常学級在籍児の中には「自閉スペクトラム症」の可能性のある者も含まれている。これまで「アスペルガー障害」など自閉症の下位分類を設けていたが、個人特性の連続性に立脚した診断名「自閉スペクトラム症(自閉症スペクトラム障害)」が用いられるようになった⁽⁵⁾。診断名がついた子どもと、つかなかった子どもを、特性の連続帯としてとらえる視点は重要なものである。障害診断の有無にかかわらず有効なものとしてユニバーサルデザイン原理がある。自閉スペクトラム症の特性(自己調整・知覚・実行機能・プラン等の困難性)が強い場合、本研究調査によって示された英語学習のどの困難性として出現するのか。さらに、ある困難性に対応可能なUDL(Universal Design for Learning)的指導法(課題への取り組みを促進する方法、知覚をより可能にする方法、実行やプランを促す方法等)はどのようなものかの図式化を試みた。諸個人特性と諸学習困難性及び効果的な指導法、これらの関係性を明示した。今後、この関係性の妥当性を教育実践的にさらに検証して行く必要がある。



(4)本取組の公表

本プロジェクトを通してのアンケート調査の詳細、研究期間を通しての英語学習におけるつまづきの分析、学習支援活動・教材の開発と収集は、2冊の報告書(2016年、2018年)に編集した。研究分担者・連携協力者を中心に、理論編と実践編をそれぞれ担当し、目次は下記のとおりである。また2冊の報告書は、アンケート調査に協力いただいた鳥根・鳥取県の全小中高等学校に配布した。

活動報告書(1)「英語教育における特別な支援の在り方 - 小中高大の連携を通して - 」(2016年3月)

目次

1. 英語教育における特別な支援の在り方 - 小中高大の連携を通して(島根大学・大谷みどり)
2. 英語学習につまずく学生の特性 - 教員の観察結果分析より(飯島 睦美・明石工業高等専門学校、大谷みどり)
3. 読み書き障害と英語学習(樋口 和彦・島根大学)
4. 英語科教員養成カリキュラムと特別支援教育(築道 和明 広島大学)
5. 先行研究紹介(大谷みどり・島根大学)
6. 英語活動案(飯島 睦美・明石工業高等専門学校、高田 純子・雲南市立吉田中学校)
7. 展望(飯島 睦美・明石工業高等専門学校)

「英語学習者のつまずきを意識した英語指導の在り方 - その理論と指導例 - 」(2018年12月)

目次

1. 理論編

1. これからの小学校外国語活動・外国語科に向けて - 山陰両県のアンケート調査結果から見える支援の在り方(島根大学・大谷みどり)
 2. 中学校・高校での英語授業において観察される学習者のつまずき - 中学校・高校英語教員へのアンケート結果より(群馬大学・飯島 睦美)
 3. 外国語学習理論から見る英語学習に影響する学び方の違い - 外国語学習適性能力と学習者の個性(群馬大学・飯島 睦美)
 4. ディスレキシアと英語学習 - 発達性ディスレキシアの特性から推測できる英語学習上の難しさ(島根大学・樋口 和彦)
 5. 発達障がいと英語学習 - 広汎性発達障がいの特性から推測できる英語学習上の難しさ(島根大学・小川 巖)
 6. 英語教員に求められる知識と指導技術 - 英語教員養成課程への提言(広島大学・築道 和明)
 7. 米国視察報告 - アメリカの教育現場視察報告(島根大学・大谷みどり)
- II. 活動例・教材例
1. 時制による動詞変化や文の操作や書くこと難しさを感じる学習者の存在を意識した活動(中釜 智子・松江市教育委員会)
 2. 単語を覚えることに難しさを感じる学習者の存在を意識した活動(中釜 智子)
 3. 代名詞、be 動詞、人称(特に三人称単数現在)に難しさを感じる学習者の存在を意識した活動(中釜 智子)
 4. 見ること、書くことに難しさを感じる学習者の存在を意識した活動(中釜 智子)
 5. 英単語の読み方に難しさを感じる学習者の存在を意識した活動(西山 正一・米子市立福生中学校いずみ分校)
 6. 自分の意見を英語で表現することや教科書本文を英語で要約することに難しさを感じる学習者の存在を意識した活動(野村 範子・鳥取県立境高等学校)
 7. 言語(英語)を分析的にとらえるという視点をもてず英文すべてを丸暗記しようとした結果、

- 英語自体に難しさを感じる学習者の存在を意識した活動(高田 純子・雲南市立吉田中学校)
8. 一つの学習方法の提示により学習活動に主体的に取り組むことに難しさを感じる学習者の存在を意識した活動(三浦 睦美・島根大学教育学部附属学校学習生活支援研究センター)
- 付録: 附属CDインデックス

紙面の制限上、取組の概要のみの掲載となったが、通常学級における英語のつまずきについて、教員の認識を把握することが出来、つまずきの原因として、音韻意識・情報保持力、ワーキングメモリ、言語分析能力等における課題が明らかになった。また英語学習以外の場面に於いては、論理性と暗記力に課題が多い子どもが多いことも明らかになった。今後は、英語の時数が増える小学校への支援を含め、英語学習におけるつまずきの原因をさらに詳しく調べると共に、具体的な支援方法を増やし実践を拡げていきたい。

(引用文献)

- (1) 林桂子(2011)「MI 理論を応用した新英語指導法 - 個性を尊重し理解を深め合う協同学習」くろしお出版
- (2) 上野一彦 KAZ 先生の Edu Blog. 文科省ヒアリングから平成 22 年 10 月 25 日掲載 (<http://edublog.jp/kaz1229/acrchive/202>)
- (3) 棟方哲弥他.(2010)「諸外国における発達障害等の早期発見・早期支援の取組み 米国、英国、フィンランドを中心に」国立特別支援教育総合研究所研究紀要、第 37 巻、2010.
- (4) 上野一彦・萱倫子・海津亜希子(2008)LDI-R:LD 判断のための調査票, 日本文化科学社
- (5) American Psychiatric Association(2014), DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院-

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 7 件)

大谷みどり、英語学習における特異な困難と指導法: 小学校外国語活動～現在の状況と課題・今後の動向について、LD 研究、査読有、Vol.25. 2016. pp.199-202

飯島睦美、英語学習における特異な困難と指導法: 指定討論、LD 研究、査読有、Vol.25. 2016. pp.205-207

— 大谷みどり・飯島睦美・築道和明・小川巖、英語教育と特別支援教育の在り方への一考、島根大学教育学部紀要、査読有、Vol.48、2015、49-53

— 大谷みどり・加賀田哲也、特別支援教育に学ぶ英語の指導技術「入門期における読み書きの指導」、英語教育、査読無、vol.64, No.2, 2015, p.73

— 飯島睦美・加賀田哲也、特別支援教育に学ぶ英語の指導技術「書くこと」の指導、英語教育、査読無、vol.64, No.5, 2015,

〔学会発表〕(計 22 件)

- 大谷みどり・飯島睦美・築道和明、外国語活動における児童の困り感～特別支援教育の視点から実施した教員へのアンケート調査をもとに、小学校英語教育学会、2014
- 大谷みどり・飯島睦美・築道和明・猫田英伸、英語教育における特別支援の在り方～小中高大の連携を通して、全国英語教育学会、2014
- 大谷みどり・飯島睦美・築道和明・小川巖、多文化共生と特別支援教育の接点～外国語活動・英語教育における取組・課題をもとに、多文化関係学会、2014
- 飯島睦美、英語教員からみた学習者の躓きと困り感、外国語教育研究学会、2014
- 大谷みどり・飯島睦美・築道和明・宮崎紀雅・三浦睦美・小川巖・樋口和彦、英語のつまずきへの支援：第2言語習得理論も踏まえた取り組みを考える、日本LD学会、2016
- 大谷みどり・三浦睦美・飯島睦美・小川巖・樋口和彦・宮崎紀雅・築道和明、英語教育における特別な支援の在り方～小中高大の連携を通して(1)：UDL を活用した今後の教員養成に向けての取組、日本LD学会、2017
- 飯島睦美・大谷みどり・築道和明・小川巖・樋口和彦・宮崎紀雅・三浦睦美、英語教育における特別な支援の在り方～小中高大の連携を通して(2)：音韻意識改善と英語学習困難の解決、日本LD学会、2017

〔図書〕(計 3 件)

- Kormos, J. & Smith, A. (訳) 竹田契一・飯島睦美・大谷みどり・築道和明 他、明石書店、『学習障がいのある児童・生徒のための外国語教育：その基本概念、指導方法、アセスメント、関連機関との連携』、2017、310
- 大谷みどり「社会のグローバル化と外国語教育」『学習指導要領改訂のポイント：通常の学級の特別支援教育』2017、28 - 31
- 大谷みどり「英語の読み書きの指導」『発達障害事典』日本LD学会編（丸善出版）

〔その他〕

- 大谷みどり・飯島睦美・築道和明・小川巖・樋口和彦・高田純子 科研中間報告書・英語教育における特別な支援の在り方 小中高大の連携を通して、2015
 - 飯島睦美・大谷みどり・築道和明・小川巖・樋口和彦他、英語学習者のつまずきを意識した英語指導の在り方—その理論と指導例—(科研成果報告書)上武印刷、2017、79
6. 研究組織
- (1)研究代表者
大谷 みどり (OTANI, Midori)
島根大学・教育学部・教授
研究者番号：80533299
- (2)研究分担者
飯島 睦美 (IIJIMA, Mutsumi)
群馬大学・大学教育学生支援機構・准教授
研究者番号：80280436
- 築道 和明 (TSUIDO, Kazuaki)
広島大学・教育学研究科・教授
研究者番号：30188510
- 小川 巖 (OGAWA, Iwao)
島根大学・教育学部・教授
研究者番号：60160743
- 樋口 和彦 (HIGUCHI, Kazuhiko)
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号：80710110
- (4)研究協力者
宮崎 紀雅 (MIYAZAKI, Norimasa)
島根大学教育学部附属学習生活支援教育センター・主任
- 三浦 睦美 (MIURA, Mutsumi)
島根大学教育学部附属学習生活支援教育センター・教員
- 中釜 智子 (NAKAGAMA, Tomoko)
松江市立東出雲中学校・教頭
- 高田 純子 (TAKATA, Junko)
雲南市立吉田中学校・教諭
- 須田 香織 (SUDA, Kaori)
島根県教育センター・主事
- 田淵 涼子 (TABUCHI, Ryoko)
鳥取県立米子東高校・教諭